

第2章 瑞浪市の概要

第1節 地理的環境

瑞浪市は岐阜県美濃地方の東部、東濃地方のほぼ中央に位置し、東は権現山（595m）や屏風山（794m）などの丘陵を境として恵那市と、西は土岐市・可児郡御嵩町と接しています。また、南は丘陵地帯を境として愛知県豊田市（旧西加茂郡小原村）、北は木曽川の渓谷を隔てて加茂郡八百津町に接しています。

瑞浪市の面積は約175k m²（東西 14.3km、南北 20.7km）で、そのうち約7割が東濃丘陵と称される丘陵で形成され、丘陵は市の北西部及び南東部に発達しています。市域の北東から西に流れる土岐川（庄内川）と、その支流によって形成された沖積地や河岸段丘を中心として市街地が形成され、主要交通路である国道19号や中央自動車道、JR中央線なども土岐川に沿って敷設されています。



図 2-1 瑞浪市位置図



写真 2-1 瑞浪市市街地

第2節 自然的環境

瑞浪市の気象は比較的温暖で、年間の平均気温は15.6℃程度（令和元年：1月平均気温は1.8℃、8月平均気温は28.8℃）、年間降水量は概ね1,630mmです。

市の北東部に位置する釜戸町にはハナノキ（ハナカエデ）とヒトツバタゴの自生地が所在しており、国の天然記念物に指定されています。また、大湫町にもヒトツバタゴの自生地がみられ県の天然記念物に指定されているほか、文化財には指定されていませんがシデコブシなどの貴重な植物の自生地も確認されています。さらに瑞浪市内には国の特別天然記念物に指定されているカモシカが生息し、土岐川には国の天然記念物に指定されているネコギギ、オオサンショウウオ等の貴重な生物の生息も確認されています。

また、瑞浪市の地質は土岐花崗岩・濃飛流紋岩から成る火成岩類、粘板岩・チャート・砂岩から成る中生代の地層を基盤とし、丘陵地は瑞浪層群（1900～700 万年前）・瀬戸層群（700～200 万年前）から成る第三紀層、河川周辺やその両岸の平地などは礫・砂・粘土から成る第四紀層で形成されています。

戦国時代には戦乱の余波を受け、市内各所にも城館が築かれ、岐阜県の史跡に指定されている「鶴ヶ城跡（神籠城跡）」・「小里城跡」はいずれも土岐氏、あるいはその一族の居城とされています。天正年間には織田信長によって改修工事が行われたとされ、織田信長の東濃支配に重要な役割を果たしました。また、戦国時代末期からの茶の湯の流行により、当市の南部に位置する陶町にも大川窯・田ノ尻窯・猿爪窯など多くの窯が築られました。



写真 2-4 鶴ヶ城跡（神籠城跡）



写真 2-5 小里城跡（大手門跡）

江戸時代の瑞浪市は、幕府の分知政策によって山村氏（3氏）、千村氏（4氏）、馬場氏、原氏、三尾氏、遠山氏、松平氏、小里氏の13領主により治められ、このうち市内に居館を置いたのは小里氏（稲津町小里）と馬場氏（釜戸町）でした。元和元年（1615）には木曾衆の山村氏、同3年（1617）には千村氏が尾張藩に付属させられ、同9年（1623）には小里氏の断家によりその知行地が天領になるなどしたことにより、市内は幕府代官、尾張藩（千村・山村）、岩村藩に加え、旗本の遠山明知と馬場の5領主によって治められることとなりました。

また、江戸時代初頭にはそれまでの中世東山道とは異なる道筋で中山道が整備され、新たな宿場として大湫宿（大湫町）と細久手宿（日吉町）が設置されました。このように、**当市の中山道の大きな特徴は、それ以前の主要道路であった中世東山道とは異なるルートを通る点にあります。**中世東山道の詳細なルートについては明らかとなっていませんが、江戸時代に記された『美濃御坂越記』（註2）の記載や、周辺に残る「宿」の地名（註3）などから、中山道よりも大きく南に迂回していた（図1-3）と考えられており、より直線的なルートに変更されたと言えます。

いわば新道である中山道が整備された目的や時期を示す記録は未だ確認されていませんが、大湫宿の本陣を務めた保々氏の由緒書である「大湫宿本陣由緒書上」には、天正元年（1573）年から大湫の開拓が始まったことが記されています。恐らく当初から宿場を設置する目的で開拓を始めたものと考えられ、中山道ルートの整備が戦国時代末期に始められた可能性を示しています。また、当地は永禄8年（1565）頃から織田信長の影響下にあり、信長は軍勢をいち早く京都に到着させるために近江国でも摺針峠を開削して中山道の新道（バイパス）をつくるなどしていた（註4）ことから、中山道も信長が軍事道路として使用するためにルートを変更した可能性が考えられます。

当時の主要街道である中山道が開通したことによって当該地は東西の文化が交流する場となりました。**日吉町半原地区に伝わる**半原操り人形浄瑠璃は宝永・正徳年間（1704～1715年）頃に淡路の人形遣いから伝えられたといわれ、**同じく日吉町に伝わる**地歌舞伎（地芝居）や

獅子舞なども中山道における人々の活発な往来によってもたらされた文化とみられます。なお、当市には他にも主要な街道として下街道と中馬街道があり、下街道は現在の国道 19 号線や JR 中央本線のルート、中馬街道は現在の国道 363 号ルートにあたります。

明治 4 年(1871)の廃藩置県により、市内は一部を除いて岐阜県に組み込まれ、同 5 年(1872)には全域が岐阜県に組み込まれるなど、行政システム・区域では様々な改革がなされましたが、中山道は依然として主要な交通路でした。しかし、明治 13 年(1880)に明治天皇の巡幸に伴い下街道の改修工事が行われると交通の**主要ルート**は次第に下街道へと移り、明治 25 年(1892)に下街道沿線に鉄道(中央線)が敷かれると、この動きに拍車がかかりました。また明治 33 年(1900)に名古屋―多治見間で開通した中央線は、同 35(1902)年には中津町(現在の中津川市)まで開通し、当市には瑞浪駅と釜戸駅が設置されました。瑞浪駅が設置された瑞浪地区では急速に都市化が始まり、周辺各村の交通も当該駅を中心としたものに移行して、江戸時代以降栄えてきた中山道の交通・輸送は衰退し、大湫・細久手の両宿場町の賑わいもみられなくなりました。

一方、瑞浪市南部の陶町では明治時代から磁器生産が盛んとなり、特に明治時代後半からは輸出用洋食器の一大産地へ発展しました。また、大正時代以降は瑞浪駅周辺に陶磁器製造・販売業者が集積するようになり、製品は鉄道などによって主に名古屋方面に販売されました。そして昭和 26 年(1951)、土岐郡瑞浪町は同郡土岐町と合併して瑞浪土岐町となり、同 29 年(1954)には土岐郡瑞浪土岐町・同郡稲津村・同郡釜戸村・同郡大湫村・同郡日吉村・同郡明世村、恵那郡陶町が合併し、現在の「瑞浪市」が誕生しました。



写真 2-6 美濃の陶磁器生産用具及び製品 (1)



写真 2-7 美濃の陶磁器生産用具及び製品 (2)

昭和 20 年代以降、市の主要産業は**陶磁器や耐火物の製造、およびその原料生産などの窯業関連産業**という状態が続き、特に陶町では複数の企業が日本を代表する洋食器メーカーに成長して、**瑞浪市の発展を支え**ましたが、昭和 50 年代以降になると人件費の高騰などの要因により、次第に生産業者数は減少に転じました。

この間、昭和 42 年(1967)に着工した中央自動車道が、昭和 48 年(1973)に多治見―瑞浪間で開通するなど、市内各地で開発が相次ぐとともに人口も増加しました。

第 4 節 社会的環境(瑞浪市の現況)

(1) 人口構造等

市の総人口は 37,018 人(令和 2 年 10 月 1 日現在)です。国勢調査等の結果で、昭和 60 年(1985)以降の人口推移を見ると、平成 12 年(2000)以降は減少に転じています。

また、年少人口（0～14歳）、生産年齢人口（15～64歳）、高齢者人口（65歳以上）の年齢3区分別に見ると、年少人口と生産年齢人口は減少する一方、高齢者人口は増加しています。

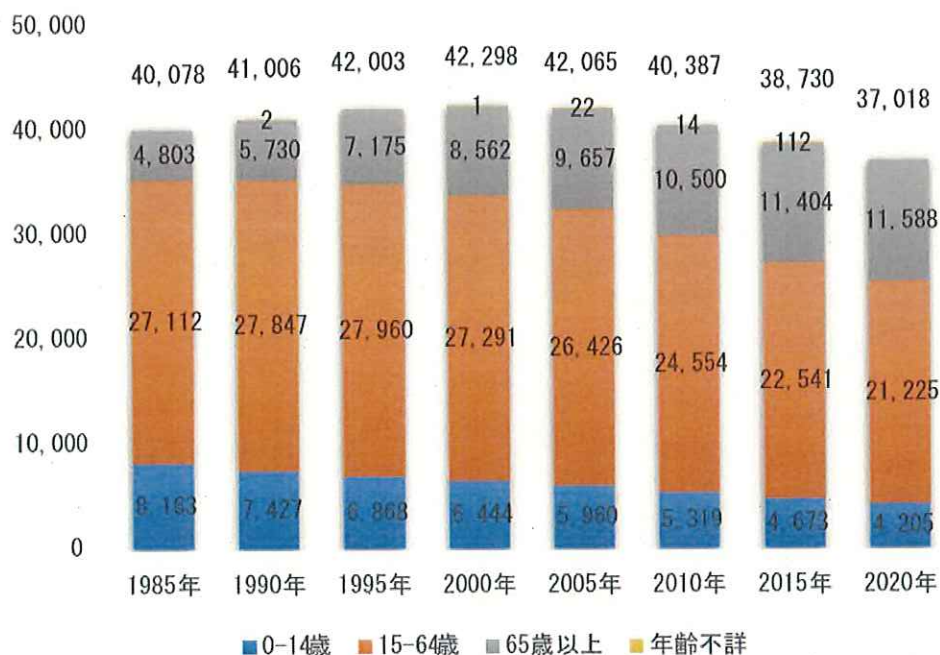


図 2-2 人口推移図

【資料：国勢調査】

※2020年は市統計データを使用。

（2）土地利用

瑞浪市の土地利用の状況を見てみると、約7割が森林であり、市の土地利用の特徴となっています。平成20年（2008）令和元年（2019）を比較しても大きな変化はありませんが、森林割合増と農地割減少には耕作放棄地等の影響、宅地の割合減には人口減少が影響している可能性が想定されます。

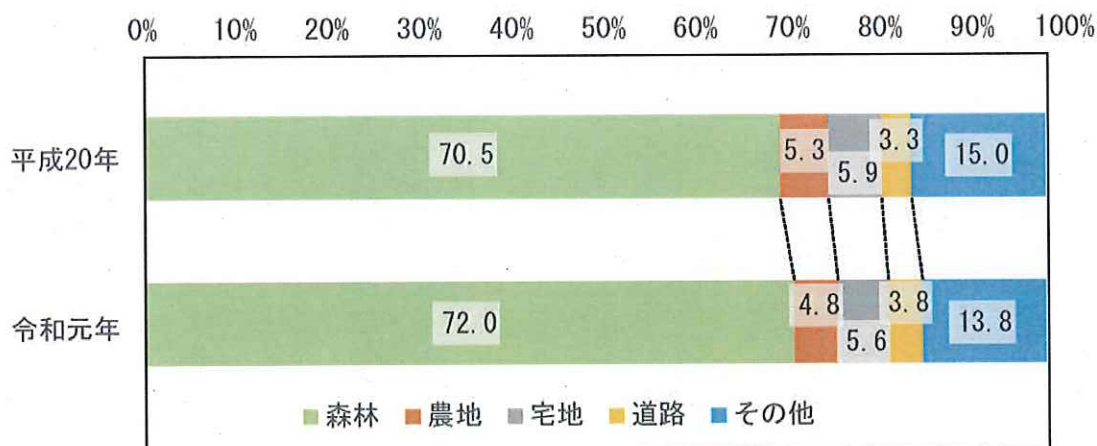


図 2-3 土地利用状況推移図

【資料：瑞浪市統計書】

瑞浪市は「化石のまち」として知られているほか、13のゴルフ場を有することから近年は「ゴルフのまち」としても知られています。また、日吉町には国名勝および天然記念物「鬼岩」（鬼岩公園）、釜戸町には竜吟の森（自然ふれあい館）など当地の自然環境を活かした観光資源もみられます。

さらに、平成24年（2012）には土岐町に瑞浪市農産物等直売所「きなあた瑞浪」、平成29年（2017）には大湫町に中山道観光案内所「丸森」を開設するなど、近年は観光振興に力を注いでいます。

（５）史跡へのアクセス

当市の中山道への来訪手段は徒歩、自動車、鉄道のいずれかと考えられますが、公共交通機関（鉄道）で来訪した場合は駅から中山道まで長距離を移動する必要があります。

以下に、市内の2駅からの移動手段および移動距離などを示します。なお、距離及び移動時間は県域統合型GISのルート検索によるものです。

◎JR瑞浪駅

【大湫まで距離：約11.6km、移動時間：自動車約23分、徒歩約2時間55分】

【細久手まで距離：約9.9km、移動時間：自動車約19分、徒歩約2時間29分】

- ・タクシー：駅に常駐しており、事前予約は不要です
- ・コミュニティバス：細久手まで、平日のみ上り2便・下り1便が運行されています
- ・デマンド交通（観光利用）：平日のみ1日3便運行しています（事前予約が必要です）
- ・路線バス（民間運営バス）：運行されていません
- ・その他：特にサービスはありません

◎JR釜戸駅

【大湫まで距離：約4.8km、移動時間：自動車約9分、徒歩約1時間13分】

【細久手まで距離：約11.7km、移動時間：自動車約23分、徒歩約2時間57分】

- ・タクシー：駅には常駐しておらず、事前予約が必要です
- ・コミュニティバス：大湫まで、平日のみ上り1便・下り1便が運行されています。
- ・デマンド交通（観光利用）：運行されていません
- ・路線バス（民間運営バス）：運行されていません
- ・その他：民間の宿泊施設による送迎のサービスがあります

【註】

- （１）土岐郡は、主として現在の多治見市・土岐市・瑞浪市を範囲とする郡です。但し、多治見市のうち高田地区を除く土岐川以北は可児郡、瑞浪市のうち陶町は恵那郡に属しました。
- （２）『美濃御坂越記』は安永年間（1772～1780）の書物とされ、当市付近の中世東山道のルートについて「御嶽一井尻一宿一志月一日吉一半原一釜戸一竹折一大井」と記載しています。
- （３）「宿」あるいは「○宿」などの地名は、中世の宿の痕跡である可能性が指摘されています。（榎原雅治『中世の東海道をゆく』2008年、中公新書）
- （４）織田信長は天正2年（1574）年から、本格的な道路整備を開始したことが指摘されています。（小和田哲男『戦国の合戦』2008年、学研新書）